早稲田商学 85　文化特集　早稲田商学同攻會　1942 年

出雲系あやつり人形　杉野橘太郎

【 要 点 】

・出雲系糸あやつり人形：および腰づかいで、古型小型人形。
　大型糸あやつり人形：　本脚場舞台
・仮名づかいは、一部、現代文に直してある。
・要約であるので、旅程、慎重な言い回しなどは割愛した。

目 次

調査内容　2
益田人形　3
出雲大社行楽館　3
出雲系糸あやつり人形の系譜　4
入善の人形　6
山口県柳井市の糸あやつり人形群　7
　マシーデコ座 （永田増次郎）　7
　石原の今井広吉(福助)座　9
　豊笑座 （今井広吉　芸名：福助）　9
　ミチーデコ （福重槌三郎）　10
　出雲大社町行楽館の糸あやつり人形　15
　佐多のデコ（島根県佐太神社）　24
口　絵　30

調査内容

山口県伊陸[(いかち)]の糸あやつり人形
山口県柳井市付近　[9ヵ所]

島根県益田市　[2ヵ所]
出雲大社　[2種] 内1は、益田と重複
島根県佐多
富山県入善　[1ヵ所]
　計　18ヵ所発見。
　内、10ヵ所は人形のみ、4ヵ所は実働。

出雲系糸あやつり人形には 2 系統ある

・最も古い型の糸あやつり人形のなごり
・明治中期に九世結城孫三郎が、小型に改良する以前の大型糸あやつり人形
　文化期(1804～1818)か、その直前に完成されていた。
　この時代の天皇は光格天皇、仁孝天皇。江戸幕府将軍は徳川家斉。

出雲系糸あやつり人形
　出雲大社町に古くから演じられる
　観光客慰安演芸場行楽館（保存）

柳井市周辺　伊陸、三丘(みつお)〈安田に改称〉
　慶応年間(1865～1869)、島根県出雲大社町から、学び移された。
　江戸系（結城座、竹田人形座）とは別のプリミティブなもの。

益田人形

明治の糸あやつり人形師山本三之助の弟三吉（本名：加藤元吉）よって持ち込まれた。

益田在の美濃豊田村大字内田。

約36体ほどの人形は、三吉の自作を用いる。

その後、益田市小松連創立により、押されてしまう。人形は、三吉が大阪文楽座の人形細工師大江定九に依頼。

結果、三吉の人形は、昭和10年(1935)に、出雲大社町へ身売りされる。三吉の弟子の品川清次郎（1953年、83歳位死去）が、指導役として出雲大社町に出張。9世孫三郎の小型糸あやつり人形「あやめ人形」[1尺7～8寸：53～54cm]改良前の、明治の大型糸あやつり人形[2尺2～3寸：67～70cm]を見る。

孫三郎が、チョ糸（頭を前後に動かす仕掛け糸）を改良したことを確認。

結城座、竹田人形座と構造は同じであるが、大きさが異なる。益田：巾6×縦5.2寸[18×16 cm]、結城座：2～3分[6～9mm]つまっている。

出雲大社行楽館

大正6～7年(1918～1919)までは、上演されていた。

小型糸あやつり人形（糸5本と7本の2種）25体が残されている。

大正10年(1922)頃まで、使われていた。

人形は、慶応(1865～1869)以前のものであることは確実。以前は田型であったものを、明治中期、人形師石倉太一郎の考案で、羽子板型に改良された。

「および腰」による操作。

山本三吉の初期の自作人形 36 体が残されている。

益田の大型三吉人形の購入と同時に、益田在内田の品川清次郎（三吉の弟子）が来社し、土地の人々に操り方を教えた。結果、この人形を使うようになった。

前後2本の歩みの本舞台。間口3間×高さ5尺[5.4×0.9m]が残っている。山本三吉の明治初期の姿を伝える。結城、竹田2座と同型。

出雲系糸あやつり人形の系譜

この数年に発見された糸あやつり人形は、柳井の5ヵ所と、佐多神社、益田小松連、出雲大社行楽館（2種類）、そして、富山入善のもの合わせて、10件となった。

現在上演可能なのは、柳井の伊陸のミチーデコと安田の三和会、益田小松連の計3ヵ所のみである。系統的に大別すれば、次のような表になる。〇印のついたものは、現在上演できるもの。

○出雲系糸あやつり人形（および腰舞台、古型小型人形のもの）

- 出雲大社町行楽館蔵の古型小型二十五体の分
  - （柳井の糸あやつり人形群）
    - 大野村のマシーデコ
      - ○伊陸のミチーデコ
      - 海部屋次郎座、その他
    - 石原の今井広吉（福助）座――豊笑座
    - ○安田（旧三丘）の三和会
  - 佐太のデコ

○大型糸あやつり人形（本脚場舞台）

- 大阪――入善
- 江戸――（中略）
  - 山本三之助、三吉
    - 益田在内田（後に出雲大社町行楽館蔵大型の分）
    - ○益田小松連
  - （九世結城孫三郎
    - ○十世結城孫三郎
    - ○竹田三之助――おざき人形座）

入善の人形

文化期[1804～1818]の大阪網島の人形師藤井長之助が伝えたのが発端。明治25年(1892)まで上演される。郷土玩具収集家の竹内弥三右衛門が所蔵。

九世孫三郎改良前の大型糸あやつり人形と同型。

「操り人形」の記事　「北陸政報」明治44年(1991) 9月25日

入善に文化期に大阪の藤井長之助によってもたらせ、近在まで盛んに公演される。明治25年(1892)まで上演されていた。

舞台は、竹田・結城系の本舞台と同型。手板、人形の内部機構は、文化期、あるいはその直前には、完成されていたと推定できる。

竹内所蔵の人形は、「二十四孝」勝頼と思われる。富山辺りの作とは思えない、よい彫り物で、木も古く大阪からのものと思われる。衣裳は、作り替えられている。

竹内の話では、入善では大正4年(1915)から10年頃まで、観音寺の祭りで5体を見せていた。この人形は、今でも町内の誰かが秘蔵しているのではないか。

永田衡吉に、入善にあまり遠くない宇奈月で糸あやつり人形が発見されたという情報が入っている。

富山県立山町の親類から、新聞記事が届く。宇奈月で、「10年前に入善で、この人形と同型の女の人形を某旧家で見たのを思い出した」という内容。

竹内弥三右衛門が、郷土玩具収集を思いたったのは、「蔵の中で、古い糸あやつり人形の頭1つと、手2～3本を発見したことです」といってい

る。杉野が訪問した際には、急なことで、どこに保管してあるのか思い出せなかった。

山口県柳井市の糸あやつり人形群

山口県柳井市周辺には、3座の農民による糸あやつり人形座がある。実働していないものを入れると9座ある。

柳井近在の糸あやつり人形の最も古いものは、伊陸のミチーデコといわれる。福重槌三郎[1961年：83歳]が、明治42年頃に、社寺の縁日で上演していたのを見て、学んだといわれる。

マシーデコ座　（永田増次郎）

座の本拠は、山口県周防国熊毛群大野村第2第9番地。現在の、平生町大字大野。

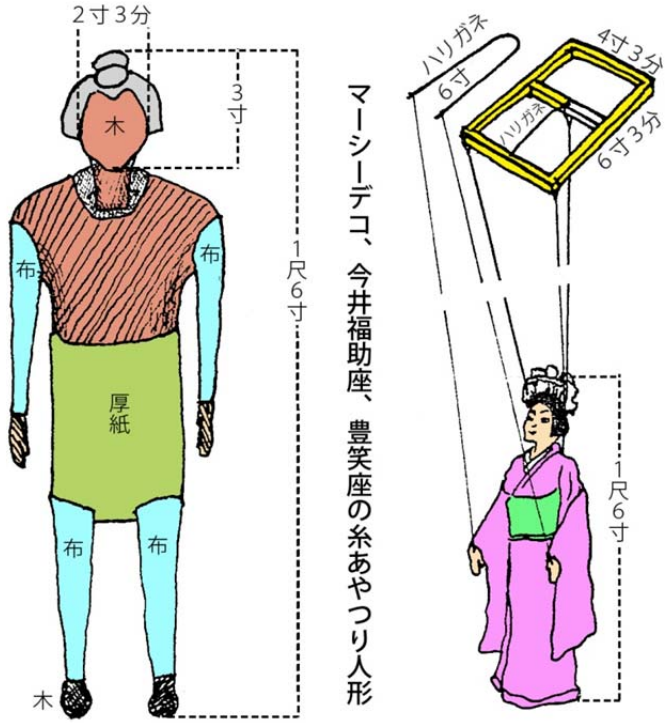
増次郎は、弘化4年(1847)生まれで、芸好きな男。慶応2年、幕府の征長軍が迫るのに備えた髙松晋作の同士、白井小介を隊長とする第2騎馬隊の隊士として岩城城に籠城した際、父勘右衛が、出雲大社に参拝し、父の武運長久を祈った。その際、杵築(きづき)、現在の出雲大社町で、この地方の糸あやつりを見た。故郷に帰って、これを見習い練習の上、人にも見せるようになったと、伝えられている。その間、たびたび、出雲大社に参り、旅費のために人形を遣って見せたといわれている。

人形は5寸[15cm]位の小さいもので、舞台も小さく3尺[91cm]程度のものであった。義太夫節を足の指に挟んだ拍子木で床をたたき、あるいは鐘をたたいて演じたと伝えられている。

マシーデコの人形は、後述する出雲大社行楽館の2種類の人形――徳川時代からあった古型の人形と、益田から昭和10年に買い入れた山本三吉作のものの内、前者の人形である。慶応年間に、永田増次郎が見物して見習って柳井へ持ち込んだものである。増次郎が見物人の一

人として、人形も舞台も見て学んで自作したものと伝わっている。川村家蔵の人形と、行楽館の人形を比較すると、構造も大きさも、ほとんど同一のものであり、増次郎が楽屋まで訪ねて、人形舞台をすっかり覚え込んできたと推定できるほどである。

手板が増次郎のものも元は田型であったことが確かめられ、行楽館のものも田型と羽子板型と、両方あることからすれば、行楽館蔵の古型小型の人形は、増次郎が慶応年間に出雲大社町で見た人形であることは間違いないと推定できる。



マーシーデコ、今井福助座、豊笑座の糸あやつり人形

しかし、福重翁かが最初にマシーデコから見習ったのは、田型手板であったことがわかった。マシーデコの増次郎が、慶応年間出雲大社町で見習った行楽館の人形には、この田型と羽子板型が残されている。前述の石原人形も田型手板が中心になっているので、本来の手形は、

田型であると断じてよいと思う。同時に、古型糸あやつり研究には、大切なヒントになるだろう。

田型は、糸あやつりが専門化された時に、日本で考案されたもので、今日、結城座や竹田人形座で、用いられているような複雑な手板は、入善の人形にも見られるように、文化以前に大阪辺りで、田型から改良・創案されたものと考える。先代の九世孫三郎の座にも、田型手板は残されていた。

石原の今井広吉(福助)座

マシーデコ座の中期、今井広吉が一座に加勢に加わった。慶応3年(1867)生まれで、松次郎より20才位若く、製薬、葬儀屋、仏壇屋などを転々とする間、芝居の衣裳屋もしていて、この方面にも詳しいところから増次郎にも近づいたらしい。増次郎が、明治43年(1910) 5月に大野村で他界した折に、人形一式をもらい受けて一座を継いだ。

豊笑座　（今井広吉　芸名：福助）

昭和初年頃に、柳井市内の石原遊郭に来て、この検番事務所の月見楼で上演を行った。この廓では、岩崎幸太郎(俳号:梅幸)、川村慶太郎」(可笑)、藤本作十(失名)、新市三こと岩長末次郎(美蝶)、奥村弁治らが、浄瑠璃の「美声連」を結成していた。浄瑠璃(義太夫節)普及のため、福助と連合して、改めて「豊笑座」を結成することになった。

柳井市新天倶楽部(現在の柳井東映)で公演をした。その後、下松(くだまつ)、岩国、大島郡などにも巡業し、好評を得ている。出し物は、二十四孝、太十、鳴門、先代萩、酒屋、壺坂、菅原、忠臣蔵などであった。この時の人形45体は、元石原遊郭の故川村慶太郎の未亡人(柳井市大字柳井2612-1)が所蔵している。

人形は、頭と衣裳共で1尺6寸[48cm]、頭は3寸[9cm]、巾2寸3分[7cm]。人形は、胸部のみ檜で、腹部は厚紙、両腕と脚は布、両手先と足のみ

木で作られている。手板は日形で、6寸3分[19cm]、巾4寸3分[13cm])で、糸は3本で、背、頭の左右に付けられている。別のU字に曲げられた針金に両手先に糸が2本付けられている。操作する糸は、合計5本である。

人形は、増次郎の初期の頃は、5寸くらいの小型であったが、福助に渡る頃には、1尺5～6寸に改良されている。平生町大字曽根の福助の養女今井春子によって、手板は、元は田型であったことが確かめられている。

豊笑座の舞台は、1間[1m80cm]位で、および腰である。

福助は、昭和15年[1965] 8月に他界し、豊笑座も中絶のやむなきに至った。戦後、さらに浄瑠璃会「柳声会」が結成され、梅幸、美蝶らが中心となり、豊笑座の復興を協議中とのことである。

ミチーデコ　（福重槌三郎）

ミチーデコの名称は、「槌」が訛ったものだそうだ。現在も、柳井市の郊外の伊陸(いかち)に健在である。かつては、東は兵庫県から、西は遠く朝鮮まで渡って2,000会以上の公演を行った。戦後一時中絶していたが、昭和26年[1950]に復活し、昭和33年には郷土芸能に尽くした功労者として、柳井市教育委員会から表彰を受けている。

かつて社寺の縁日の盛り場で演じていたマシーデコもミチーデコも、この地方では、なじみ深く郷土色の豊かなものである。柳井市から5キロ位も離れた福重翁を訪ねたが、小高い丘の上に、こぢんまりした藁葺きの農家の縁先には、遠くからも舞台が幕で張られているのが見えた。

福重翁は、明治 34 年[1910] 2 月生まれで、81 歳。腰も曲がらず、がっちりとしたにこやかな老人である。

翁が語ったところによると、18 歳頃から踊りや歌舞伎を好み、近くの松ヶ谷へ振り付けに行ったり、自ら新派劇の台本を書いて振りも付けたり、田舎まわりの歌舞伎の座へも入ったりして学んだこともあるそうだ。

明治42年の春、マシーデコを見て、糸あやつりに興味を覚え、自分も急にやりたくなって、柳井の町の人形屋で抱き人形の頭を50位、55円で買い入れた。田布施の小行司川村弥作（福重翁より30歳年下）という、地芝居で振り付けや下座をやったという人と人形の衣裳を作り、髢（かもじ）をとかし、2日くらいで人形を作り上げた。舞台は大工の藤岡という男に、組み立て舞台を考案してもらったということだ。

ミチーデコで風変わりなのは、地方（じかた）が浪花節だということだ。福重翁は、ちなんだ俳名を浪花梅山と名付けている。出し物は、岩見重太郎、佐倉宗五郎、女松杉梅、水戸黄門、五郎正宗、新鑑山久松、桃太郎、国定忠治、魁梅次義侠伝、義士、一ノ谷軍記、千本桜、妹背山、播州皿屋敷、弥次喜多道中、それといつも開幕時にやる三番叟と獅子舞があり、全部で 40 余りという豊富な番組が用意されている。

この日も、私たちのために、三番叟と獅子舞を、次に魁梅次義侠伝を見せていただいた。最も興味を引いたのは、両足指にツケ木をはさみ、足踏みをしては拍子をとることである。もちろんツケの役目も果たす。鳴り物には、このほか、鐘、太鼓、拍子木、三味線が用いられた。

人形のつかい手は、通常2人でやる。同村の中原佐一（1959年：62歳）さんは40年来の相手役である。家でやるときは、長男の静男さん（1959年：51歳）と、奥さんのつたさん（1959年：74歳）も助手役を務める。

人形は、自家製の紙と糊で作った簡単なもので、肩板もなく、胴は厚紙を巻いて作り、頭は紙を糊で固めてゴフンを塗った素朴なものである。人形は、全長2尺[60cm]くらいの大型である。糸は計5本のうち、頭糸（ずいと）と、頭の左右、都合3本を鐘木のT字形の手棒へ結び付ける。人形の両手をU形か2本棒の先に付けて操る。他に、6.2cmの羽子板型手板もあり、撞木の代わりに用いたり、時には両手とも、2本棒の先に付けたりして操る場合もある。羽子板タイプは、福重さんの考案にだという。

ミチーデコの頭は、現在20位あり、中になし割り1ケ、獅子舞に使う動物の人形もある。舞台は、太さ1寸[30cm]、長さ1間[1m80cm]の棒を舞

台巾とし、3尺[90cm]棒を奥行きにして、簡単に腰舞台を組み立てる。背景の上の棒には木製のカギ形の人形つるしがさされていて休んでいる人形をこれにかけて固定させる。人形には木は一切使われていない。

自作の人形は実に素朴そのものであり、福重翁の自己流の独創である。たった5本の糸であるのに人形は実にすばらしく動く。福重翁は心から芝居の境地に入りこんで、この土地に実にふさわしい感じの浪花節に合わせて、人形を踊るように動かす。

人形を浪花節でやるのは、糸あやつりではここだけだが、三人遣いでは鳥取県気高郡豊実村に明治中期からのものがあり、小寺融吉も昭和18年[4193]に、これを観て調査報告を書いている。小寺の言をかりれば「この長所は次の如くであろう。第一に義太夫のそれとちがひ、題材が無限にあること、第二には義太夫とちがい、予備知識がなくとも一字一句が分り、筋がよく分る。義太夫はさうはゆかぬ。だしぬけに三段目の切を見せられても、何が何だか分らぬ上に、知らない者には文句も聞取れない。大衆が浪花節を愛する気特は分るし、これと人形が結びつくことは、一つの方法でもある」といっている。もちろん、短所として人形の動作をぴったり合う規律的な音楽性が欠如していることもあげているが、人形への効用を説いている。この草深い片田舎と、卑俗だといわれる浪花節とは、小寺が三人遣いにとって、糸あやつりには自然な結びつきを感じさせる。これは私の予想以上だった。

いずれにしても、ミチーデコを創始した福重翁は、マシーデコを見物して自分の頭で舞台も人形も作り上げた点は、マシーデコの永田と全く同じだが、福重翁の場合で特異な点は全く創作的な点である。第一に、浪花節を地方として採用したこと。第二は、人形の頭を、木でなく紙をノリでかためて作ったこと（木を用いなかったことは、技術的・経済的な理由もあったこともあるが）。第三には、事実朝鮮にまでにも及ぶ2千回と

いう旅に便するための、かついで歩ける簡単な組立式舞台を創案している。

また、実に素朴そのものの人形ながら、操り方に観客を充分にひきつけるだけの、熱と技術とセンスをそなえていることなど全く独創的である。しかし、人形の操り方そのものは出雲からの伝承というべきだろう。

さて、同じ伊陸の元浪曲師だった海部屋次郎も人形を操り、一座をもっている。福重翁はこの人や前述の今井広喜とも組んでやったこともあるようだ。前述の福重翁の相手役の中原佐一や、同村の井上土蔵、近隣の丸田惣太郎（周東町別所畑）、河岡林次郎（南河内村）など、みな福重翁から学んで独立しても、やれる仲間であるようだが、目下は福重翁のみが最も盛んな活躍を続けている。以上のうち、マシーデコ（義太夫）と、ミチーデコ（浪花節）と、その系統の人々は、七井氏周辺の農村で活躍したが、石原遊廓の今井と、豊笑座の義太夫系とは、旧柳井町民の間で演じていたものである。

ところが、ここに1ヵ所離れた熊毛郡熊毛町の旧三丘（みつき）、地名改正で現・安田の尾崎素一さん(1959年：64歳)による「三和会」という形式の、まったく柳井と同系の義太夫による糸あやつりがある。しかし、この人形の起源の伝承は他の柳井の人形群とは全く別途なものである。今から300年前の元禄年間、領主の宍戸阿波守就附が領内の市の日を制定し、安田の市は毎月21日と定められた。安田人形の起源は、近隣諸国の商人がこの市に集った中に阿波の愛染の商人松尾某が安田に来て、ここに寄寓し、営業のかたわら阿波の人形を手作りして、浄瑠璃と共に近隣に伝えた。明治に入っては、善兵衛（姓不明）、岡野英吉、尾崎馬之助などこれを伝承していた。

明治末期から昭和初期まで中絶していたものを、熊毛町長の有馬草々子(本名：貢)が復活。現在、馬之助の息子で、収入役の尾崎素一（旧：三丘村）が座員8名と共に三和会を組織し、土地の十楽荘や、夏病除けの神として遠近の信仰を集めている和霊神社の毎年の土用18日間の祭礼の際や、敬老会のための上演を行っている。近隣の下松（くだまつ）、花岡、八代、高水などにも客演している。

人形は1尺5寸[46cm]。右手へ1尺[30cm]程の棒2本を、糸で人形の両手先へつないだものをつかみ、左手で人形の頭につけた3本の糸を結んだ鐘木棒を持って人形を遣う。舞台は伊陸のミチーデコと同形式のおよび腰舞台である。

阿波起源の糸あやつりの伝承ということになっているが、人形、舞台共に伊陸と同一のものであるということで、阿波起源のものであるということとは全く食い違うことになる。あれほど三人遣いの浄瑠璃人形の盛んな四国に、我々は今日まで糸あやつりの伝承をつかむことができない。また、文献も見出せない。

小寺が糸あやつり師の吉田才寿の弟子であった末広家才寿老人から聞いたという糸あやつりの座の話に「阿波の人吉田春之助の一座、吉田才寿の一座が東海道を伊豆辺りまで明治初年頃は巡業していたものであった。大正の初めに大阪に居た幽蘭座というのは、その系統であらう」というのがある。だが、この話はこの吉田2人共、阿波出身というだけで、遣っていた人形は後述する大阪系の糸あやつりで、阿波の人形を遣っていたという意味ではないと思う。また、阿波から大阪へ伝えたものとも思えない。

草薙金四郎も香川県の人形研究「人形の村」の巻末に「糸づり人形の調査も不充分である」と書いておられるように、私も四国に、糸あやつりが見出されない訳がないと思う。

安田の人形は、今日の形から見れば同じ近在の伊陸と全く同形であることから見れば、直接阿波の人形を移した名残とは思えないのである。

これについて、この人形を復活した有馬草々子氏も谷林氏宛の手紙の中で「一、貴殿(谷林)御調査の伊陸人形と、何もかも酷似して居るので同系のものと思います。

阿波の商人が（人形浄瑠璃の心得ある人）が三丘（現：安田）に土著して伝えた事になっていますが、これは人形芝居の技術面が主で、人形そのものは伊陸系人形をもってやったのだろうと思います」と書いておられるが、私も全く同感で、安田の人形は起源当時の人形は何とも言明できないが、明治以後のものは伊陸と同系統のものと考えるべきだと思う。

以上、安田の三和会も含めて柳井市の人形は、義太夫系と浪花節系と二流があるとしても、人形の形式からはいずれも同一の出雲大社系の古型と見なすべきで、その素朴さから純粋な郷土芸能というべき糸あやつりである。山口県のへんぴな農村の片田舎で、現在も糸あやつりが行われているのは、わが国でもこの柳井周辺が唯一の存在であり、それが明るみに出されたことは、本当に嬉しいことであり、貴重な存在でもある。

出雲大社町行楽館の糸あやつり人形

益田の人形は大型の系統に属する糸あやつりである。出雲にも大型・小型の両系統があるが、この稿では柳井と関係ある出雲大社の古型小型糸あやつりのみについて述べる。次に、同じ小型の佐太神社の糸あやつりについて述べたいと思う。

いうまでもなく、出雲大社町と出雲大社のある町で、つい最近までは杵築(きづき)といっていた、日本古来の町としても知られている。出雲大社の参拝客で賑わい、町には古くから旅館も多い。

出雲の阿国の後裔代々は、ここの近くの生地の名の中村をとって中村家を称した、中村守一氏(1959年：45歳）を訪ねた。ここで劇場を持って歌舞伎もやり、「大社御免御賑操座本　中村紋五郎」の八分身大のケヤキの免札看板を、所蔵しているように操にも関係していた。阿国の墓と、晩年住んでいいた庵といわれる連歌庵、一名阿国寺や記念塔も名所の一つとなっている。

今の中村守一氏の先代までは、幾代か中村紋五郎を名乗り、骨董屋をかねて大社諸門の開閉をあずかる「門鍛治」ともいわれていた。役者業は34代の国一(本名/昭和33年[1958]物故)で終り、今の守一氏から蒲鉾屋を生業としている。

昭和35年[1960] 11月20日、大社教管長千家尊宣に大社の貴賓室で御目にかかった。中村守一氏があの重い八分身もあろうというケヤキの看板を、わざわざ自宅から自動車で運んで来て下さっていたことである。中村氏はこの免札が何代目の紋五郎のものであるか不明だといわれた。しかし、歌舞伎の中村家が何時の日か、操座の座本(元)であったことは確かである。

ここで問題となるのは、この「操」という言葉が、三人遣いをさすのか、糸あやつりをさすのか、また、この操座が、現在行楽館に所蔵されている人形の古型のものと関係があるのかどうかという点にある。古来、「操」という言葉は文献上では、手遣い人形にも、糸あやつり人形にも使われていて確定的ではない。しかし、大社町の場合では、町の人形伝承にも、遺物にも三人遣いというものが片鱗も現れない。行楽館の小型人形は「中村座の人形」と伝承されていることなどから、この看板の「操」は糸あやつり人形と解すべきものと考えられる。

では、文献の上ではどうであろうか。出雲の阿国は大社の宮鍛治の中村三右衛門の娘で、自らも大社に奉ずる巫女で、中村家としては既に8代目で、宝永6年[1709]の中村吉郎次が12代目。中村家役者最後の国一氏が、この三右衛門から34代の子孫で、現在の守一氏は35代に当ることになろう。しかし、「中村紋五郎」を34代目も名乗っていたことは確かだが、何代目からこの名が用いられていたかは明らかでないらしい。したがって、中村家に伝わる御免の看板も何代目のものか明らかでない。

この看板と関係があるかどうかは全く不明だが、大社考古館主任の大谷従二氏から谷林氏へ提供された資料として、出雲大社の弥宣で古

文書係の故広瀬鎌之助の調査された国造家旧記の承応元年[1652] 3月7日と12日に「大島井に御操候」というのが判明している。大鳥井とは大社の大鳥居のことで、この前で操りが演じられたものと思う。小寺氏も孫引きだがといって、このこと前の文献であげている。

承応期の人形といえば、人形はまだ突込式の一人遣いの頃で、もちろん「操」という言葉はこの一人遣いにも、糸あやつりにも、使われていた頃のことだから、この操が一人遣いなのか、糸あやつりなのかは、これだけでは断定できない。どうも人形芝居には関係ない歌舞伎興行らしい記録だが、享保17年[1732]のものとして次の記録がある。

大鳥芝宮地間数之覚

一、南北拾壱閏但土手煉リ北へ鳥居前道限リ
東西拾参間但東通覧夕芋打出シ拾三間之外面方芝居掛由時弐間定可申受
北分其方親代ヨリ修理免御年貢上納申来ル付此度大鳥居御境内一面ニ被成候ニ付相紋其ノ方へ預置候処紛無之候

一、御祭礼之節芝居諸方之者より敷地弐貫文宛相定置侯此芝居もの通人之者宿等之儀其ノ方宅ニ引請申分子細有細間敷候若宅ニ置申時は座本に遂相談裁許可然候
右之通無相違被仰付御神事芝居在之由太切ニ相勤可被申侯若芝居ものまたハ座本相手取及□論不調法品在之内も早速座本並預り置地御取上ケ可被成侯随分太切に相守候者子々孫に至る迄相違有之間敷条伽而如件

享保十七年子三月

長谷浩酒
北海左衛門

中村市郎兵衛殿

この享保17年[1732]の記録は歌舞伎芝居の興行らしいが、次の明和5年[1768]と寛政3年[1791]の記録では明らかに人形芝居となっている。

一、中村吉之亟先祖門五郎人形芝居取立御神事賑芝居今興行右ニ付座本極置今以以無間断相勤来候　　（以下略）

明和五年戊子七月

北島弐部
千家築後

長谷　円殿
北島市美殿
高浜左伊殿

定

今度操芝再興行披仰付是迄之仕来ヲ以其元座本ニ俣所無紛ニ相勤候ニ付当時より御祭礼度々大芝居出小見世物ニ至ル迄木戸入札壱枚ニ付銭壱文宛□所務旨被仰出候尤小見世物之分追出シ札に平垢可請取之者之者也

寛政三亥七日

新田葛馬
佐々信濃
北島左衛門
長谷志賀

座本　中村門五郎殿

この門五郎というのは紋五郎のことではないかと思う。もしそうだとすれば御免看板は既にこの頃に葦村家言ったことになる。人形芝居もやっていたことになるが、この操はどんな操だったか。明和期には既に三人遣いはやっていたから、この人形芝居が三人遣いでないともいえない。しかし、後で述べる行楽館蔵の古型小型の人形が、明らかに「中村座のデコ」だといわれており、出雲周辺では珍しく三人遣いの事跡も、人形も一つも発見されていないことから総合すれば、私は文献上では

一貫して糸あやつりが行われて来たものと解すべきだと思う。
実物の人形について考えてみなければならないが、安改頃の記録として黒目次郎兵衛の「杵築古事記(明治22年[1889]、未刊行)にも中村座に関する記事として、次のようなのがあるから、それをあげておこう。

> 大昔は熱溜りの処に松山多く半分頃より西は松山にて却て持分ありしが寛文に松平直政公大社と所々広く横ひ熱溜りも西へ広くなり大芝居北向きに入り十九間東西二間あって北辺大に小店其外商人の店かり建小家其賑いわん方なし然るに門鍛治が持分此処にあるよしにて土地地銭と号侯仮銭を集る事願出し年々集けるが例としける又座本中村門五郎と看板提灯をかけ或は十日の芝居なれば門鍛治芝居と号け十一うつて一つは其所得ありしに安政元年寅十一月六日大地震によって小屋破却し其後安政七年申八月分の新小家に建直り道古道を新馬場と付け一切事替り成り門鍛治も手放れとなりけり又金輪松と云てありしもいづれ此辺なるべし

10日の芝居11日打って、1日を門鍛治芝居と称してその一日分は、中村家の所得となったのだから中村家の収入は相当莫大なものであったに違いない。これもどうやら明治以前までのことで、小寺氏が土地の新聞から引用しているところによると「御一新以来、芝居も此附近一体の中村の地官地となったために、運上金が少しも取れぬようになり」事情は一変してしまったものらしい。

さて、話を元へもどして、中村家が座元のこの操座ではどんな人形を操っていたのだろうか。町の「行楽館」には明らかに中村座の人形と伝承されている1尺5〜6寸[45-48cm]の糸5本と、7本で操る古型小型の糸あやつり人形25体と、益田渡来の大型(2尺2〜3寸[67cm])の人形36体とがある。我々は、舞台裏下手の楽屋へと通された。すでに、人形のつめてある箱がいくつも取り出されていて、2つ位の箱からは人形も出されてならべられていた。町の古老でかつて人形も遣ったことのある染物

職の金山新一氏(明治25年[1892]生)と、座の世話役をつとめていた森房吉氏とが、我々のために説明役として来場されていた。時間が3時間位しかないので、私は人形を調べ、山崎君にはかたっぱしから写真にとってもらうよう手分けして、人形を箱からとり出した。取り出した人形は結局25体の古型小型の人形と、36体の山本三吉作益田在内田から買取った大型の人形の2種類ということは、はっきりわかった。
益田の方は、後日別稿でまとめて書くとして、この内の古型小型の方の人形の説明をしょう。古型のものものは糸は5本と、7本の2通り。人形の天地は衣裳共で1尺5〜六寸[45-48cm]。頭と、のど木と、手首と、胴とが、桐、または檜でできていて大部分は植毛、または墨書きの髪で、相当古いものもある。
この古型のものが何時頃から伝わり、何時まで実際に使用されていたのか。ここに問題がある。古老金山新一氏はこの年73歳であるが、話によると、この町で大型の方の人形を、益田から譲り受けたのは昭和10年[1935]か、11年で、それまで古型小型の人形が操られていて、金山氏もこれに加っていたという。古型よりもはるかにに秀れていて複雑な益田の大型人形が現れて、古型の方の人形は文字通りお蔵となってしまったわけである。

すると、この人形は何時頃からあったものか。金山氏の話では、「大正中期に久邇宮妃殿下が大社へおいでの折、この人形の上演を御見せしたそうだ。その折には、300年位前の爺婆の人形2体があったが、多分これがそうだったと思う」と見せられた。人形の婆の方は、衣裳は後に変えたものらしい官女風の後の時代のものだが、頭は300年前のものとは思えない。もっと人形の彫の発達してからのもので、どうも小寺氏が調査の折に見た「お国遺愛の人形と称するのは、天地1尺6寸、頭と首は、2つのもので、手は手先だけであり、胴の廻り九寸、石のきんたま(ト云フ)がついて重心を取り、足は無い。帯はうしろで結んで、顔は文楽座でいふ婆だ。着付が昔から比の通りではないのだろうが、先づ六段

目のおかや婆さんである。かういう顔の人形がお国時代からあるとは信ぜられない」という人形であるらしい。

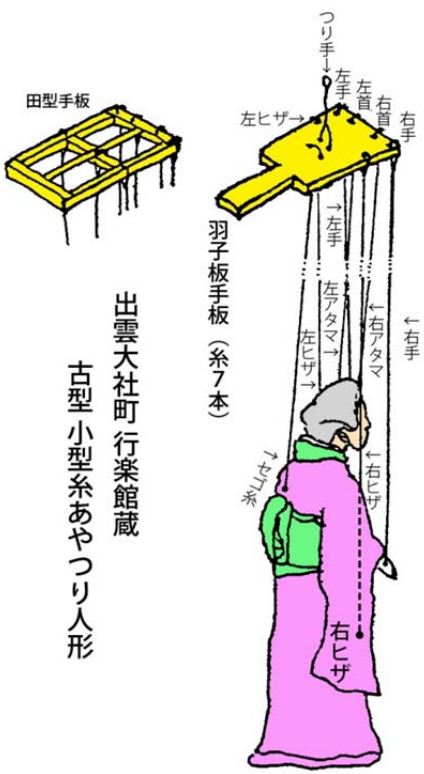
爺の方も、わけのわからない衣裳が著せられているが、木の脚がむき出しでつけられている。この二つの人形は、古い方の小型人形だと説明されているのに、益田の36体の人形へ仲間入りをしている。これと同じ系統の小型で、千松と政岡に流用されている二体の人形も明らかに益田のものではなく、彫もよく益田のものも仲間入りしても間に合うところから、流用したものと推定される。

すると明らかに古型のままの姿で残されている21体に、この4体を加えると、古型のものは全部で25体あることになる。

お国時代の人形とは、誇張された伝承に過ぎないにしても、古型人形の頭が、大部分植毛であることは、カツラ以前の古いものということはいえる。田舎廻りの人形とすれば、カツラは大阪・江戸などで発明されて、人形にも使用されたはるか後年に属するから、植毛だけで手遣い人形の場合ほど確定的な古さをはかることはできない。人形自体の木の古きから見ると100年位はたっているよう患えるが、確定的なことはいえない。大社人形の最古の記録の承応元年[1652]に、すでに「大鳥井に御操候」とあるのを、糸あやつりと断定するとすれば、現存の古型の人形は、当時の型を伝えて、後に新に作り直された人形と考えてもよいと思う。

こう考えれば、前記、山口県柳井在の大野村の永田増次郎が、慶応年間に杵築(今の出雲大社町)で見て移しとって作ったマシーデコ人形が、この大社の人形とほとんど同型であることから、この大社の古型人形はマシーデコ伝承と全く一致することになる。

だが、ここで一つ問題となるのは、この古型人形の手板である。行楽館の古型人形の手板は、現存のものは皆檜の羽子板型(全長、六寸四分[19cm]。板の部分、巾上部：三寸四分[10cm]、下部二寸九分[8.8cm]。



長さ：三寸七分[52cm]。柄の部分、長さ：二寸七分[8.2cm、巾つけ根の部：八分「2.4cm」、下の部：一寸[3cm]、板の厚さ：三分[10cm])である。これについて金山老は、「大社の人形の手板は、元は田型だったが、明治の中年に石倉太一郎という人形の浄瑠璃を語っていた(本職が銀細工人だった)人が、根が器用で人形の細工や修理もし、この羽子板手板を発明したのだと聞いている」と語っている。すると、永田が大社町で慶応年間に見て学んだ当時の人形は、田型手板を用いていたと考えられ、マシーデコの手板も前述したように、田型を承けたものだから、この点でも一致することになる。言い代えれば、柳井の糸あやつり群は、すべて出雲系であると断定できよう。

明治になってからこの人形も中村家の手を離れ、一時廃絶されて、この町の長崎屋という女郎屋の土蔵にしまわれて忘れられてしまったらしい。案内役の森房吉氏の話では、この長崎屋の当時の若主人だった吉雄卯太郎が明治35～6年[1902-03]頃、町の有志と共に若葉会という義太夫の会を創った。ところが、吉雄は蔵の中から糸操り人形を発見し、以来この会の余興として人形を実演することになった。

森氏と旅館業の藤原虎次郎とが世話役となり、虎屋旅館の佐藤俊一、日の出館の主人小川与四郎、それに山根宗四郎と、羽子板手板を作ったという石倉太一郎などという人が協力して「お国座若葉会」を創立

し、大正7～8年[1918-19]頃には、最も盛んに上演された。この頃の大福帳、基金出納簿などを見ると、大鳥居前、神光寺、潮音寺、円通寺の境内、小学校、時には千家内大広間、その他近在が上演の場所となっている。昭和3年[1928] 6月には、お国座付属若葉会の「浄瑠璃若葉会規的」も改めて作られ、初期の人では吉雄、小川、石倉など3人が残っており、別に金山百二郎、持田熊市、伊藤辰三、若槻光郎、杉原広三、外、女義太夫5名、全員15名が加っている。

前述したように、昭和11～2年[1936-37]頃、益田在内田の山本三吉作人形、つまり現行楽館蔵の大型の方の人形を若葉会が買取り、内田から三吉の弟子品川清次郎が、新しい人形の操りの指導役として来るにおよんで、小型の人形は廃止されることになったものである。いい残したが、この当時の小型人形の舞台は、竹を用いた組立式のおよび腰舞台で、間口2間[3m60cm]、高さ3尺[90cm]位であったというから、柳井のマシーデコの永田が真似た舞台とは、木と竹との相違で大きさは同じ位であったものと思われる。

気にかかるのは、この出雲系人形が何時、どういう経路で此処へ入り込んで来たかである。前記の文献だけ見ても、どうも初期のものは一人遣いのようにも思われるが、この土地には一人遣いも、三人遣いの話も全く出てこないのだから、糸あやつりをこの土地古来のものと考えるのが一番自然ではないだろうか。「お国遺愛の人形」という怪しげな伝承は、信ぜられないにしても、この人形がもし型だけとしても、当時からの名残であるとすれば、また、ひょっとしたらこの土地の様々な文化がそうであるように、直接朝鮮を経由して支那から入ったものとも考えられ、もし、そうだとしたらこれは大変なものである。文献でも実物に就てでも、何も証明できるものが

出て来ないのは残念である。益田から入った人形も、大東亜戦争開戦の前年の昭和15年[1940]頃まで上演を続けた。おし迫る戦連に、ついに廃絶されてしまい、今日では出雲大社町教育委員会の手で行楽

館の地下に眠っている。

いずれにしても、この小型の糸あやつり人形は、わが国現存の最も古い糸あやつり人形の型を残しているものではないかと推定される。明らかに山口県柳井の糸あやつりの源泉となったものでもあり、次に述べる佐太神社の糸あやつりに影響を与えたものとも思われる。実に貴重な文化財というべきものだと思う。しかもこの型の糸あやつりが西日本だけの限定された地域に存在していることも、また面白い事実である。

このまま行楽館で箱詰めにしておくことは、ただ虫に喰われることを意味するだけで、もったいないと思うので、土地の教育委員会や、出雲大社や町の関係者の方たちの協力で、県か町の文化財にでも指定し、考古館か博物館へでもかざって永久保存の道をこうじていただきたいものである。

佐多のデコ（島根県佐太神社）

島根県鹿島町の佐多神社の糸あやつり人形。20体の糸あやつり人形を神楽殿の梁の上から発見。

43cmの人形に、10～12本の小型の糸あやつり人形。「T」か「干」型の手板。胴は地元の桐材らしい。

34代正神主 朝山嘉基が、明治の始めに創始。神能を司る「社家（社中組）」により、夜間、神楽殿の横の裏で、義太夫にて上演された。

人寄せ的な余興の性格をもっていた。および腰で演じられ、上演の最後に陽物を持った雲水の人形が、おかめの人形と「おけさ」を踊った。幕切れには、あやしい行為に及ぶという筋立て。

明治33年(1900)くらいまでは、神社で上演されていた。以後、60年あまり、箱詰めにされ、神楽殿の天井に納められ、忘れ去られていた。

当時、「佐多のデコ」と呼ばれていた佐多神社の糸あやつり人形は、出雲大社行楽館の古形小型の糸あやつり人形とほとんど同型。地理的

に非常に近いことや、佐多神社と出雲大社が、かつては覇を争う関係であったことを考えると、年代的に古いと思われる出雲の糸あやつり人形を、明治に入ってから、佐多でも対抗的にまねたものではないかと思われる。

佐太神社は山陰本線松江駅からバスで約6kmの東にある。正しくは島根県八束郡鹿島町佐大村にある。神能でも有名だが、一般には菅原伝授の賀の祝の切「佐太の社の旧跡も神の恵と知られける」の佐太の段で、知られている地名でもある。

佐太大神(さたのおおかみ)を祀り、清和、醍醐天皇の頃より国幣に預り、江戸時代には杵築(今の出雲大社)、御碕の2社と共に出雲3大社と称され、大正14年[1925]正式に国幣小社となった。出雲大社からは30km東によった同じ日本海に面した地である。佐太(佐陀とも書く)神社には、慶長年間[1596-1615]に社家の宮川清秀、秀行親子が能の神能(かみのう)に範を取って始めたという神能(じんのう)がある。

出雲各部の神職が集った8月の莫蓙替の神事の折、7座の神事と共に、宮川父子新作の神能を演じたという。後に、出雲各地に普及して、大原能、飯石能、備中神楽などができたが、今では佐太神能が一番格式あるものを伝えているとして、大正15年[1926] 4月の第2回「郷土舞踊と民謡」の会には、東京明治神宮外苑の日本青年館へよばれて、十二番の神能中の「八重垣」(須佐之男命の大蛇退治)を上演している。この社には神楽の司として、古くから神職家の「社家」があったが、今では「社中組」とも呼んでいる。明治3年[1870]に、神能は祭典楽に非ざるの故を以って禁令が下され、社家の多くも神職を去って、帰農・転商してしまい神能も衰微してしまったが、後で私の推定するように、明治32～3年[1899-1900]頃に再び復活運動が起った。前記の大正15年の上演はこうした復活運動の賜物であったらしい。

この佐太神社の神楽殿の梁の上から突如として、昭和35年[1960] 5月25日、ぼろぼろになった20体の糸あやつり人形が発見されたのである。土地ではこれを「佐太のデコ」とか、「あやつり芝居」と呼んでいる。

前年の私の西日本糸あやつり調査の折、調査如何ではまだまだ新しい発見の可能性があることを予想していたの。同行した山崎君が松江市の島根大学教授の音楽家山本力氏に調査を依頼したところ、この発見となった。まず、山本氏が5月25日、佐太神社へのりこんで、第1回目の調査を山崎君に報告。つづいて8月6～12日、山崎君自らのりこんで第2回目の調査をした。その結果を、昭和36年[1961] 5月15日、早稲田大学における日本演劇学会研究発表会で発表した。これからの私の報告の事実に関する部分は、山崎君の報告基づいて書かれたものである。

佐太神社には、今日まで第38代の主職たる宮司家の朝山家が続いている。現在の宮司(正神主)の朝山芳国(よしくに)氏は、39歳、第38代目に当る。氏の話によると、発見された糸あやつり人形は朝山家34代の嘉基(よしもと)正神主(文政3年～明治22年[1820-89])が、その息子35代の嘉兼(よしかね)(嘉永元年～大正4年[1848-1915])と共に、明治初年に創始したものだそうだ。

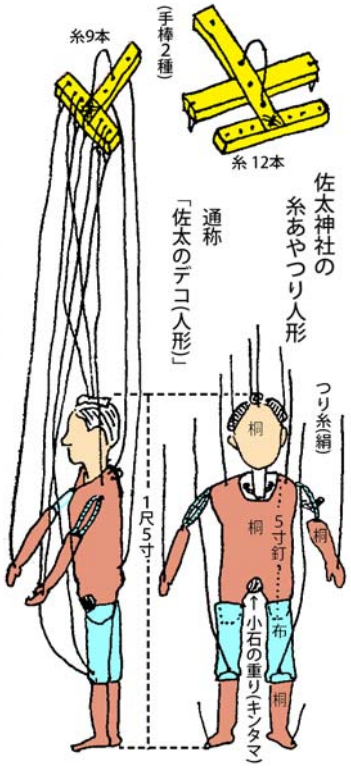
明治初年とは何年をさすのか。この神社には神能の伝統があるのに、どうして糸あやつりを始めたのか。芳国氏蓄氏と山崎君との間に、そうした問答はなかったのか。私の推定するところでは、明治3年の神能の禁令によって参拝者の数に大きな影響を受けた神社として、ほど遠くない出雲大社の糸あやつりにヒントを得て、これを真似たものでないかと思うのである。

その裏付けともいうべきものに、佐太のデコの大きさ・構造が出雲の糸あやつり人形と全く同型であり、当時杵築では、まだ盛んにやっていたと思われる。距離的にも近い佐太に杵築のデコのことは、充分に知られていたと思われるからである。もしこの推側が当っているとすれば、それ

は明治4～5年[1871-72]と考えられる。もし、4年とすれば嘉基が51歳、嘉兼が23歳に当り、年齢的にも父子協力に最も適した時期にも相当するからである。

それならば、この人形は何時頃まで演じられていて、何時頃に廃止され、神社の神楽殿の梁の上へのせられて鼠の巣と化したのか。山崎君が佐太宮内や、御津村などの農漁を営む古老で、昔若い頃このデコを見たという70～80代の人々から、克明に聞き歩いた話。この人形が発見された折、鼠のフンと人形と一緒に出てきた新聞紙に明治30年[1897] 1月の日付が見出されること。これらを綜合すると、明治32～3年[899-1900]まで上演が行われたと推定される。

それなら、この頃どうしてデコをお蔵にしてしまったのか。これが前記の禁止令からは日も立ち、明治も深まり、日清戦争後民心もおさまり、人心も次第に文化に関心を持ち、神社でも神能の復活運動が起り、ついにその機が熟して、もはや糸あやつりの必要性を感じなくなったのが、佐太のデコの消滅と、神能の復活となったのではないかと思われるがどうだろうか。



発見されたデコは、全部で20体。男のデコは全長1尺5寸[46cm]で13体。女のデコは、全長1尺2寸[30cm]で6体。内、婆1体であり、他に子供のデコ1体。男女各1体のデコには頭が失われている。

人形の頭、胴、ビジから先の手脚は、土地の桐で作られ、約5寸7分[17cm]の胴の下腹部には石の重りのキンクマが付いているは、明らかに出雲大社のデコから学んだと思われる点である。出雲大社と違う点は、人形の首が、頭とノド木とが、一つになってしまっている点と、手板が田型ではなく、T型(17ケ)又は干型(4ケ)であることである。これは出雲大社の人形を、遠くから見て学んだもので、手にとって学んだものでない相違からくるものではないかと思う。

人形は社中組(この名称は禁令によって、社家という言葉が用いられず、半ば神職をはなれた人々に用いた名称ではないだろうか)の人々によって操られ、人形は宮大工の秋山久兵衛が製作し、今佐太宮内にいる農の安達正利氏(1959年:43歳)の言によると、この人のおじいさんに当る安藤房右衛門が人形も遣い、義太夫の弾き語りも務めていたとのことである。出しものは千代萩、勘平腹切り、みながわ(力士)、式三番、太十、鳴門などで、別に切の出しものとして、おけさ踊りが、坊主衣裳の袴下に大きな陽物をつけたデコと、おかめ姿の若女とで踊られた。幕切れに、袴をたくし上げて、おかめにまたがり、怪しげな行為に及ぶというものまで用意されていた。神能衰退期の佐太神社の参拝者寄せの一策とも推測される。

山崎君が山崎友市という古老から聞いた談話から推定すると、上演は神社正殿から二段下の横馬場といわれる平台の右寄りにある神楽殿の横へ、高さ1尺5寸[46cm]の涼台の上へ組建てられた間口3間[5m40cm] (正味2間[3m60cm])、高さ4尺[1m21cm]、奥行3尺[90cm]の舞台で行われた。背景が舞台裏との境となり、この手摺り越しに操る、および腰舞台である。

舞台上手に少し斜めに一間の巾の義太夫座。反対の下手に少し斜め約一間[1m80cm]の花道が作られ、ここでは出遣いとなって、もう一段おりて後の楽屋へ回ったものらしい。

稽古は、朝山本家の百畳敷台所で行われた。上演は夜間に限られて

いたらしい。照明には燈心油が一文字と両袖につけられていた。見物は「横馬場」へ蓆(むしろ)を敷いて座って見た。見物は無料である。

時には、近郷へも移動上演を行ったらしく、乾はつという85歳の婆さんは5歳の折御津の旅館で見たといっている。金崎六右衛門(70歳)は、5才の折、分家で見たと語ったそうである。

座には名称はない。朝山嘉基が座長格で、人形細工人は秋山久兵衛と、その子の秋山作一が当たった。太夫には、安達房右衛門のほか、3～4名がいた。衣裳は房右衛門の女房が当たった。操り手は、房右衛門のほか数名の者がいた。

以上、数年前までは想像もし得なかった糸あやつりの古い2つの系統である、出雲(大社)系の古型小型のものと、大阪から入善に入った文化期のもの、および、明治期の山本三吉が益田に伝え、後に出雲大社町へ譲渡された同型大型のものとを発見し、一応ある程、明らかにできたことは実に喜ばしいことである。この稿では抵数の関係で、出雲系糸あやつりのみしか発表できないが、入善と益田のものについては稿を改めて、報告したいと思う。

出雲系のものについても、調査に時間と費用を限定されていたため、まだまだ不備・不満な点が多く、調査の歩を進めれば修正される点も多いと思うし、もっと明確にすることのできる点が多々ある。

私も機会ある毎に調査を続けたいと思うが、他の関心を持たれる方々、あるいは特に土地の研究者の方々には充分な研究の機会もあることと思うので、是非御協力と私の調査の修正を御願いしておきたいと思う。

参考文献

・谷林博(報告者) 「柳井市の糸あやつり人形座について」 柳井市教育委員会。昭和34年3月。非売品。

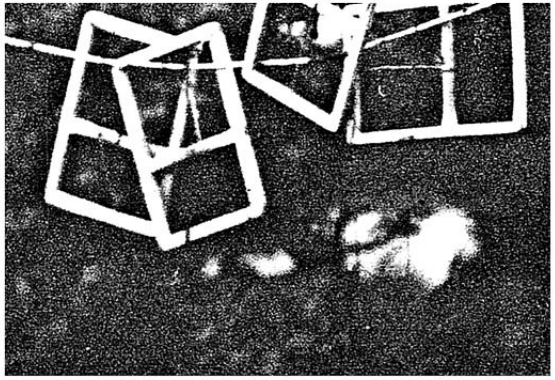
・小寺融吉 「人形芝居調査の旅」。『旅と伝説』第16巻、7・8月号連載 昭和18年

・坪内博士寵念演劇博物館「国劇要覧」 第3編『人形劇』、第10章『糸あやつり』、第1節『糸あやつりの沿革」 昭和7年5月 東京:梓書房

・薙金四郎 「人形の村」 昭和29年10月 髙松:香川県教科図書株式会社。

・山崎(久松)構成 「益田・出雲系糸あやつり人形(表題ではない)」「研究報告」第8号 昭和37年(掲載予定)。

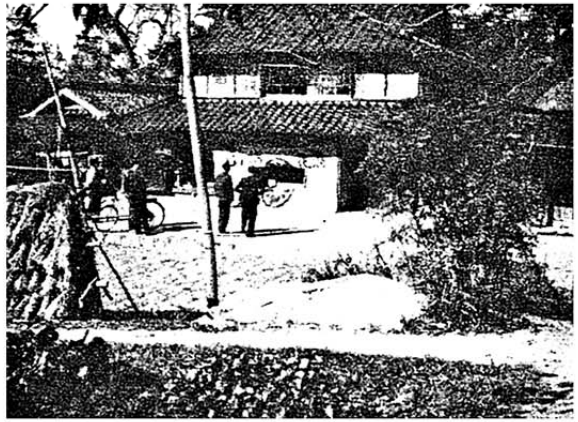
(1) マシーデコと今井福助座人形の保管される柳井の石原遊郭



(2) マシーデコ及び今井福助の手板

(3) マシーデコ及び今井福助の糸あやつり人形

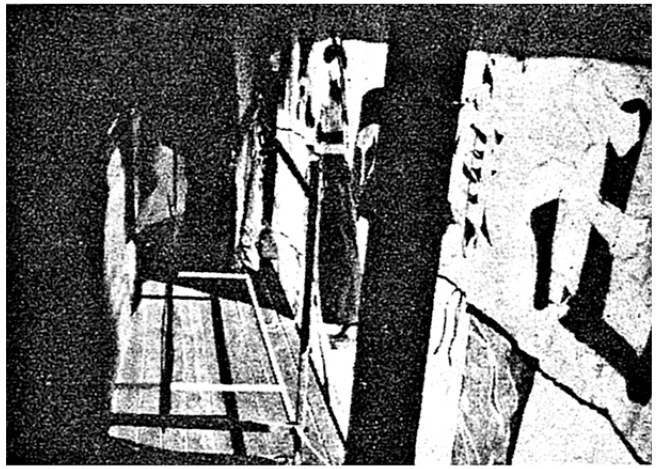
(4) マシーデコ及び今井福助の衣裳内部



(5) ミチーデコの福重槌三郎翁の家へ設けられた舞台

(6) 人形を操る福重翁と下座の弾き語りをする つた夫人

(7) ミチーデコの舞台，操る人，右より中原佐一氏，福重槌三郎（浪花梅山）氏，福重静男氏



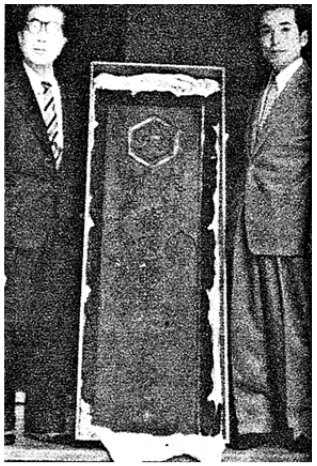
(8) ミチーデコの組立舞台

(9) 安田の三和会主宰者尾崎素一氏と

(10) 三和会の糸あやつり人形，義経千本桜の狐忠信

(11) 義経千本桜の静

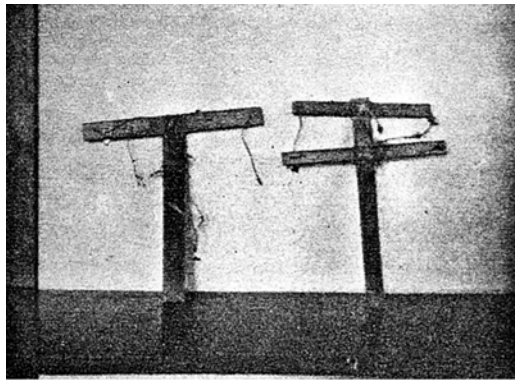
(12) 三和会の人形



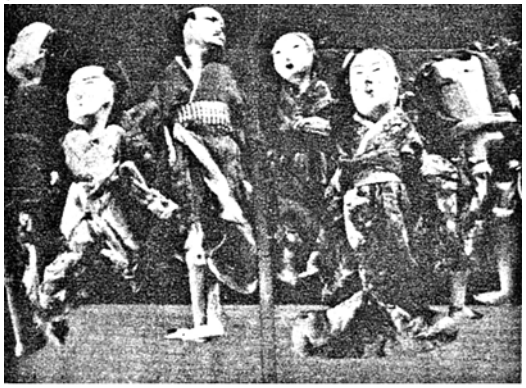
(13) 出雲のお国の後裔中村守一氏所蔵の「大社御免御嶽操座本中村紋五郎」の看板，右中村守一氏左杉野橘太郎

(14) 行楽館蔵阿国遺愛の人形と伝えられる古型糸あやつり人形

(15) 出雲大社町行楽館蔵糸あやつり
人形の古型小型のもの



(16) 佐太のデコの手棒



(17) 佐太のデコ